

源氏物語 光る君誕生

一、『源氏物語』 平安時代半ば（一〇〇八年） 物語 五十四帖からなっています。光源氏が亡くなり、舞台が都から宇治へ移った最後の十帖を「宇治十帖」と呼びます。同時代作品に、清少納言『枕草子』があります。左図の／の部分で分かれる三部構成となっています。

源氏物語 全巻名

桐壺(きりつぼ)・帚木(ははきぎ)・空蝉(うつせみ)・夕顔(ゆがほ)・若紫(わむじ)・末摘花(すえつむはな)・紅葉賀(もみじのが)花宴(はなのえん)・葵(あおい)・賢木(さかき)・花散里(はなぢり)・はなぢり(はなぢり)・須磨(すま)・明石(あかし)・瀧橋(たきはし)・みおつくし・蓬生(よもぎう)・関屋(せきや)・絵合(えあわせ)・松風(まつかぜ)・薄雲(うすぐも)・朝顔(あさがお)・少女(おとめ)・玉鬘(たまかすら)・初音(はつね)・胡蝶(こちょう)・常夏(とこなつ)・篝火(かきりび)・野分(のわかき)・行幸(みゆき)・藤袴(ふじばかま)・真木柱(まきばしら)・梅枝(うめがえ)・藤裏葉(ふじのうら)・若菜上(わかなの上)・若菜下(わかなの下)・柏木(かしわ)・横笛(よこふエ)・鈴虫(すずむし)・夕霧(ゆき)・御法(ごほふ)・みのり・幻(まぼろし)

匂宮(におのみや)・紅梅(べにばら)・竹河(たけがわ)・橋姫(はしひめ)・椎本(すいもと)・しいがもと・総角(そうかく)・あげまき・早蕨(さわらび)・宿木(しゆく)・東屋(あすまや)・浮舟(うきふね)・蜻蛉(かげろふ)・手習(てならひ)・夢浮橋(ゆめうきばし)

二、『冒頭文』すらすら読め、書けるようになるのが望ましい。

いづれの御時(おほんとき)にか、女御(にようご)・更衣(かうい) あまた侍(さぶら)ひ給ひけるなかに、いとやむごとなききはにはあらぬが、すぐれてときめき給ふありけり。

御時：ある天皇の御治世 女御・更衣：いづれも天皇の夫人を指す語句。女御は寝室の世話、更衣は着替えの世話をす
る意味。 あまた(数多)：たくさん やむごとなし：高貴だ、立派だ、放っておけないほどだ きは(際)：分
際、身分 ときめく(時めく)：時流に乗って栄える 寵愛する

※いとー打消||あまり…ではない。

問 P134 L2 「が」の意味は何か。答え…**同格** いとやむごとなききはにはあらぬ(あまり高貴な身分ではない人)

= = (同じ人のことを言っています。)

すぐれてときめき給ふ(たいそう天皇から寵愛されている人)

※読みと意味に注意すべき語句※
下臈(げらふ) 宮仕へ(みやづかへ)：宮廷に出仕すること あつしくなりゆく(篤しくなりゆく)：病気が重篤になる 里(さと)がちなり：実家に帰って過ごすことが多くなる様子 飽かず：満足せず 飽きることなく 物足りなく
えはばからせ給はず：え+打消||不可能 (天皇は)気兼ねなさることもおできにならない 上達部(かんだちめ) 唐土(もろこし)：中国のこと 後見(うしろみ)：後ろ盾になって助けること。また、その人 契り(ちぎり)：前世からの因縁 大殿籠もる(おほとのごもる)：天皇がお休みになる やがて：すぐに、そのまま 御局：女官の控え室

三、あつしくなりゆく：「篤し」重篤、危篤という言葉が浮かぶと、「病気が重い」と判断しやすいです。

四、この文の直前に「前の世にも、御契りや深かりけむ」(前世からの縁も深かったのであろうか)とあり、帝と桐壺更衣が前世からの深い縁で一緒になり、寵愛されていることが語られ、「**その上更に**」玉のように美しい男子が生まれたと話題が添加(上乘せ)されている。
また、ここでは「男の子が生まれたこと」が何より大切なことである。女の子が生まれていれば、そんなに問題はなかった。

五、「一の皇子の女御はおぼし疑へり」(第一皇子を生んだ女御は、第二皇子が皇位に即くのではないかと(私の生んだ第一皇子は皇位に即けないのではないかと、疑っていらっしゃる。))

若紫

※読みと意味に注意すべき語句※

伏籠(ふせご) 烏(く)などもこそ見つくれ：「も+こそ+已然形」||心配だ、嫌だ、不快だ(逃げた雀が烏などの大きな鳥に見つかったら大変だ) 乳母(めのと) 後見(うしろみ)：陰で人を助け、世話すること 御髪(みぐし)

二、「いづ方へまかりぬる。」：報告課題③裏面「憶良らは今は罷らむ」の場合は、「高貴な場所から退出する、お暇をする」の意味でしたが、ここでは雀の動作で「行く」の丁寧語として扱います。||行ってしまいましたのか。

三、「ねび/ゆか/む/さま/ゆかしき/人/かな」と分けられますが、「ねび」||大人びる、成長するという語と、「ゆかしき」||見たい、知りたい、聞きたいなど、関心があること、が分からないと訳せません。↓「大人になった様子を知らたい人であるなあ」

ここでは、もう一か所、成人する将来のことを思いやって、その美しさを想像する場面を抜き出す問題です。

明石の君と姫君

※読みと意味に注意すべき語句※

宿世(すくせ)：前世、宿命

えも言ひやららず・えなむ堪へざりける：え+動詞+打消語||最後まで言い切ることができず・堪えることができなかつた

念じあへず：我慢することが困難な状態、我慢できない

ちもなく、無邪気に

御佩刀(みはかし)：御車(おんくるま)：当時の貴人の乗り物は牛車

教科書 P 143 L 10 の説明文中に出てくる四名に楯円をつけてあります。人物関係の把握のため、参考までに。

指示語に注目して読んでみましょう。

P 141 L 9 かうこそはおはすらめ：他の高貴な方と同じようでありやしやる、ということを表しています。

L 10 かやうならむ日：こんな(雪の降った)日

P 142 L 11 かくくちをしき身のほど：こんな(私のよう)な)取るに足りない身分

P 143 L 3 さりや：そうであるなあ(泣いている様子を見て、「泣くのは無理もないよなあ」ということ)。

源氏物語人物相関図

